

病理病態検査学特論Ⅱ (Advance of Pathological AnalysisⅡ)

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開	
山口央輝、澤田浩秀	1年次後期	選択	2	30	講義	あり	卷末掲載	可	
授業概要 (内容と進め方) 及び課題に対するフィードバック方法	病理病態検査学特論Ⅱでは、認知症の現状、認知症疾患の概要、発症機構、認知症の臨床検査からその予防法について教授する。また、神経変性疾患全般およびその代表疾患としてパーキンソン病について発症機構、最新治療法などについて概説する。高齢化に伴い認知症患者が増え続ける現状において、認知症患者との接し方、および今後の認知症対策および予防について学修する。課題に対するフィードバック方法/レポートに対して討論するほかコメントをつけて返却する。								
授業の位置づけ	本学のディプロマ・ポリシー③「健康に対する社会的ニーズを認識するとともに、グローバルな視野を持ち、科学的根拠に基づき、自ら考え、判断し、課題解決に向けて対応することができる。」及び④「臨床検査技師の役割を探究し、臨床検査学分野の高度な実践者、教育者及び研究者として社会に対して責任を果たし、貢献できる。」の達成に寄与している。								
到達目標 (履修者が到達すべき目標)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知症の概要、発症機構、臨床検査法、予防について理解できる。 2. 神経変性疾患全般およびパーキンソン病の発症機構、最新治療法などについて理解できる。 3. 認知症患者との接し方、認知症への対策、予防についての見解が述べられる。 								
時間外学習に必要な学修内容および学習上の助言	<p>第1回～第15回事前学習：事前に計画されている単元について予習を行っておく/分からない用語については調べておく (各30分)</p> <p>第1回～第15回事後学習：講義内容で不明な点は、講義終了直後もしくはオフィスアワーを利用して質問するなどして明確にするよう努める/毎回の講義の復習を十分行うこと。毎回の講義の復習を十分行うこと。(各30分)</p> <p>※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間 (2単位15回科目の場合：予習+復習4時間/1回) (1単位15回科目の場合：予習+復習1時間/1回) (1単位8回科目の場合：予習+復習4時間/1回) を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。</p>								
授業計画	第1回	認知症の現状と政策 (講義)					山口央輝		
	第2回	認知症疾患の概要1 (講義)					山口央輝		
	第3回	認知症疾患の概要2 (講義)					山口央輝		
	第4回	認知症の発症機構1 (アルツハイマー病、前頭側頭型認知症) (講義)					山口央輝		
	第5回	認知症の発症機構2 (パーキンソン病) (講義)					山口央輝		
	第6回	認知症の臨床検査法1 (血液、脳脊髄液) (講義)					澤田浩秀		
	第7回	認知症の臨床検査法2 (嗅覚、脳波、MRI) (講義)					澤田浩秀		
	第8回	認知症の予防法 (講義)					澤田浩秀		
	第9回	認知症患者との接し方 (講義)					澤田浩秀		
	第10回	認知症患者との接し方に関する討議 (ゼミ)					澤田浩秀		
	第11回	神経変性疾患の発症機構と最新知見 (講義)					澤田浩秀		
	第12回	パーキンソン病の最新知見と最新治療法 (講義)					澤田浩秀		
	第13回	認知症の現状および予防に関する討議1 (ゼミ)					澤田浩秀		
	第14回	認知症の現状および予防に関する討議2 (ゼミ)					澤田浩秀		
	第15回	認知症の現状および予防に関する討議3 (ゼミ)					澤田浩秀		
評価方法 評価基準	レポート (60%)、プレゼンテーション (40%) で評価する。								
教科書	特に定めない			参考書等		担当教員が資料を配布する。			
学生へのメッセージ	認知症はこれからの社会において避けては通れません。在宅医療を考える上での知識として重要です。毎回の講義の復習を十分行ない、討議には積極的に参加することを求めます。								